

## 平成 29 年度 JACET 中国・四国支部

### 秋季研究大会プログラム&発表要旨

日時：10月21日（土）13:00 ～ 受付

場所：香川大学法学部棟（幸町南キャンパス 南6号館：高松市幸町1-1）

13:00 ～	受 付			
13:30～13:40	開会式			
	開会の辞	支部長	岩井千秋（広島市立大学）	
		大会実行委員長	中住幸治（香川大学）	
	事務局からのお知らせ	事務局長	三宅美鈴（広島国際大学）	
13:45～16:00	研究発表			
16:15～17:00	講演 1			
17:05～17:50	講演 2			
17:55～	閉会式			
	閉会の辞	副支部長	高橋俊章（山口大学）	

#### 第1室（第1講義室）

タイムキーパー：Ian Willey（香川大学）

発表1：Can Conceptual Metaphor help us teach Linguistic metaphor?

(13:50 - 14:20)

Andrew Tidmarsh（愛媛大学）

発表2：広島大学における TOEIC(R) L&R テスト演習を中心とした授業実践

(14:25 - 14:55)

森田光宏・吉川りさ・阪上辰也

鬼田崇作・草薙邦広・榎田一路・上西幸治（広島大学）

発表3：チーム基盤型学習（TBL）において概念理解に影響を与える要因の質的検討

－英語教育学専門科目のアクティブ・ラーニング授業実践から－

(15:00 - 15:30)

関谷弘毅（広島女学院大学）

発表4：中学校の英語授業における4技能の統合的な活動の類型化

(15:35 - 16:05)

北木律子（安田女子大学大学院）

第2室 (第2講義等)

タイムキーパー：Gerardine McCrohan (香川大学)

発表1：英語学習におけるワーキングメモリの働きについて

—処理と保持に焦点をあてて—

(13:50 - 14:20)

藤村美希 (安田女子大学大学院)

発表2：日本人英語学習者が正しく冠詞の選択が出来ない原因に関する量・記述的分析

(14:25 - 14:55)

高橋俊章 (山口大学)

発表3：「音読」から「表現活動」へ—学生の相互評価を活用して—

(15:00 - 15:30)

小崎順子 (川崎医療福祉学)

発表4：下位レベル学生における多読のあり方に関する一考察

—授業内外での多読の試みから—

(15:35 - 16:05)

三宅美鈴・山中英理子・遠藤利昌 (広島国際大学)

第3室 (第4講義棟)

タイムキーパー：水野康一 (香川大学)

発表1：小学校外国語活動と中学校英語科の円滑な接続について

—語彙に焦点を当てて—

(13:50 - 14:20)

岡田紗希 (安田女子大学大学院)

発表2：意味重視のアウトプット活動が学習者の教授言語に対する好みに与える影響

(14:25 - 14:55)

岩中貴裕 (山口学芸大学)

発表3：大学英語教員の教育に関わる役割認識についての質的研究

(15:00 - 15:30)

森谷浩士 (広島経済大学)

発表4：「先生！」を英語でどういうか？—翻訳例に基づく呼称についての一考察—

(15:35 - 16:05)

堀部秀雄 (広島工業大学)

第1室にて

講演1

司会：中住幸治 (香川大学)

(16:15 - 17:00)

「The needs Analysis: Why We Need it, and How to Conduct One」

講演者 Ian Willey (Higher Education Center Kagawa University)

## 講演 2

(17:05 – 17:50)

「The Importance of Register in Communication Strategies」

講演者 Gerardine McCrohan (Higher Education Center Kagawa University)

17:55 – 18:00

閉会式

開会の辞

副支部長 高橋俊章 (山口大学)

懇親会 場所：三ッ矢堂 鍛冶屋町店

時間：18:30～

費用：5,000 円

## 研究発表 要旨

### 第 1 室

#### 講演 1 要旨

##### **The needs Analysis: Why We Need it, and How to Conduct One**

English has become the primary language of correspondence in a number of fields, including education and medicine, yet surprisingly few analyses of the English needs of professionals in various fields have been conducted. The void in Japan is especially prominent. The presenter will first introduce the concept of the needs analysis, and describe the issues involved in the planning and execution of a needs analysis. Following this, the presenter will introduce a study conducted over the past three years to ascertain the English-language needs of doctors and nurses working at five different hospitals in Kagawa prefecture. Both quantitative (questionnaires) and qualitative (interviews) methodology were employed. Findings from this study are now being used to inform the design of English courses as well as in-service English education programs for working doctors and nurses. Attendees will be invited to share their views on needs analyses as well as the perceived needs of the students in their particular teaching contexts.

#### 講演 2 要旨

##### **The Importance of Register in Communication Strategies**

Pragmatic knowledge consists of the possession of an adequate awareness of the social rules of speaking. In this context, it has been found that without planned support to maximize pragmatic development, learners are prone to pragmatic failure. Moreover, the acquisition of situational knowledge coupled with the ability to linguistically shift from one style (register) into another, according to interlocutors' status and the extent of imposition, are both extremely important for EFL learners. However, this is not always easy for students to acquire and simply telling a student "this is what we say to be polite" is not enough because of differing cultural concepts of politeness and face.

This presentation describes the preliminary findings on students' ability to recognize situational context and adapt the register of language used accordingly. In this study, the focus was on students' use of communication strategies in different situations that would require a pragmatic shift in politeness. Two university classes participated in this study: one class was composed of 12 higher level students while the

other class consisted of 20 lower level students. It was found initially that while students in both classes had some awareness of register they were unable to adapt their language to the situation. However, as the semester progressed, students' awareness of the importance of situational context increased, as did their attempts to alter the register of language used.

## 第1室

### 発表1 : Can Conceptual Metaphor help us teach Linguistic metaphor?

Metaphor is problematic for second language learners, causing significant misinterpretations and false conclusions, yet little is known about how to teach it. Some researchers have suggested using awareness-raising strategies or increasing the size of SLL's lexicons. However, these approaches do not mitigate against the effect of cultural background, or help students deal with a broad range of figurative language. Conceptual metaphors, as set out by Lakoff and Johnson, have been shown to underpin a large proportion of figurative language. For example, the conceptual metaphor, PROGRESS IS FORWARD MOTION motivates the linguistic metaphor in "the project has ground to a halt". The study presented here therefore explored whether conceptual metaphor can be used to help students deal more effectively with linguistic metaphor. After completing a pre-test, an experimental group was introduced to five conceptual metaphors and trained to use these to help find and interpret linguistic metaphors. A control group was given reading exercises unconnected to figurative language. Finally, both groups were given a post-test. Analysis shows that learning conceptual metaphors using an awareness-raising approach for a short time has a limited effect, with factors such as L1 influence also proving problematic. Continuing research in this area will focus on using more structured training with illustrations and mnemonic devices, and this presentation will give a preview of this.

### 発表2 : 広島大学におけるTOEIC(R) L&Rテスト演習を中心とした授業実践

広島大学では平成29年度第2タームより、TOEIC(R) L&R テスト演習を中心とした「コミュニケーション演習I」を開講した。医療系学部の199名の学生を対象として、90分授業を週2回、8週間に渡って行った。毎回の授業では、前半に、公式問題集である『TOEIC(R) Listening & Reading 問題集1』とオンライン教材であるALC NetAcademy NEXT『TOEIC(R)600点突破コース』の中から、指定された範囲から出題する小テストを実施し、後半には各授業担当者が習熟度に合わせたテスト演習を行った。このような授業実践の結果、ターム開始前の5月に実施したTOEIC(R) L&R IP テストの得点に比べ、ターム終盤の7月に行ったテストでは、大幅な伸びを見せた。授業最終日での受講生アンケートでは、授業全般及びオンライン教材について、どの程度TOEIC(R) L&R の得点向上に役立ったかを質問したところ、いずれの項目においても肯定的な意見が過半数を占めた。今回の授業実践により、TOEIC(R) L&R の得点が大幅に伸び、受講生も、授業及び教材が役立ったと回答していることから、一定の成果を上げたと考えられる。一方で、TOEIC(R) L&R の得点やアンケートの分析から、今後の指導の方向性を含め改善すべき課題も見えてきたが、それらの詳細については当日の発表で紹介する。

### 発表3：チーム基盤型学習（TBL）において概念理解に影響を与える要因の質的検討

#### －英語教育学専門科目のアクティブ・ラーニング授業実践から－

##### 1. 問題と目的

教育再生実行会議（2015）による第七次提言において、「小・中・高等学校から大学までを通じて、課題解決に向けた主体的・協働的で、能動的な学び（アクティブ・ラーニング）へと授業を革新」することが求められている。関谷（2017）は、大学の英語教育学専門科目における、アクティブ・ラーニングの一形態である TBL（チーム基盤型学習）を取り入れた授業を実施し、前年度に行った講義形式の授業と比較検討した結果、TBL 型授業の方が概念理解及び学習意欲に好影響を与えることを示した。本研究は、TBL 型授業を通して学習者の概念理解がどのように変容するのかを質的に検討することを目的とする。

##### 2. 方法

TBL 型授業は毎回、0) テキストの指定された箇所を読んでくる（予習）、1) 四者択一の問題に個人で取り組む、2) 4～5 人のチームで同様の四者択一の問題に取り組み、チームの答案を決定する、3) 各チームが答案を発表し、他チームと答案が異なる場合正答を巡って議論する、4) 教員が正答を伝え補足説明する、5) 次の授業で行われる語句説明の記述式問題に備える（復習）という手順で行われた。所定の範囲が終わった後、概念理解を問う記述式の試験を実施した。前年度の GPA から概念理解度の得点を予測する回帰分析を行い、予測値よりも高い概念理解度得点を得た受講生（TBL により学習が促進された受講生）、予測値よりも低い概念理解得点を得た受講生（TBL により学習が抑制された受講生）からそれぞれ 2～3 名抽出し、半構造化面接を行った。発表当日にはその分析結果を報告する。

### 発表4：中学校の英語授業における4技能の統合的な活動の類型化

現行の中学校や高等学校の学習指導要領の中で、4 技能を統合的に育成する指導の充実と、4 技能を統合的に活用することについて述べられている。日常生活においても、技能が統合されている場面は多くある。例えば、本を読み、その感想をノートに書いておくことは、読むことから書くことへの技能の統合であったり、学校の授業で先生の話聞き、それをノートにまとめることは聞くことから書くことへの技能の統合であったりする。技能の統合は日常生活で当然のように行われているため、今後の英語授業でも取り入れられるべきものである。しかし、現在の中学校や高等学校では、4 技能の統合的な活動は重要と思いつつも英語授業の中で十分に実施できていないと感じる教員が多い。また、教科書の内容にプレゼンテーションやスピーチなどの活動をもっと取り入れてほしい中学校や高等学校教員の要望もある。このことから、現在の中学校や高等学校の教科書には4技能の統合的な活動が十分に取り入れられていないのではないかと考え、教科書調査を行った。本発表では、中学校の英語検定教科書全 18 冊の調査を行い、4 技能の統合的な活動を取り上げ、類型化したものを示す。統合的な活動が教科書内に取り入れられている割合、統合的な活動の技能の組み合わせ、統合的な活動の題材内容、統合的な活動の題材内容と文法項目の関係の4つの観点から調査結果を発表する。

## 第2室

### 発表1：英語学習におけるワーキングメモリの働きについて

#### —処理と保持に焦点をあてて—

次期学習指導要領における英語教育の目指すところには、4技能を活用し実際のコミュニケーションを行う言語活動、「ことば」への関心を高めるための言語運用に必要な能力を伸ばすという視点の重要性がこれまでより一層説かれている。こうした言語運用能力を支えているものの一つに、学習者の認知能力が考えられる。そのため、学習者の発達段階に応じた認知能力、情報処理能力について知ること、そして、それらと言語運用能力との関係について明らかにしていく必要があるのではないだろうか。しかしながら、コミュニケーション能力の育成を重視している中で、そうした能力の下支えとなる認知機能と言語運用能力との関係についての調査は多いとは言えない。そこで、本研究では学習者の能力の下支えと言える認知機能の一つとしてあるワーキングメモリの働きについて、そして、それに関する研究の歴史を心理学、特に認知心理学の見地から概観する。また、それら記憶の測定法についての先行研究についても比較検討を行った。そして、ワーキングメモリのサブシステムである処理と保持の機能は、学習者の英語力（言語運用能力）と相関があるのか、そして、リーディング、リスニングといった問題形式によって差がでるのかについて調査を行った。その結果、リーディングとリスニングにおける処理と保持の機能には差があることがわかった。その詳細については当日発表する

### 発表2：日本人英語学習者が正しく冠詞の選択が出来ない原因に関する量・記述的分析

高橋（2016）では、20名の日本人英語学習者を対象とし、パス解析及び決定木分析を用いて冠詞選択のプロセスを分析した。分析の結果、日本人英語学習者は Master（1990）が提案したモデルと類似のプロセスで冠詞の決定を行っていることが判明した。ただし、なぜ日本人英語学習者達が正しい冠詞の選択が出来なかったかという点については疑問が残った。高橋（2016）のデータを用いて、量・記述的な分析を行った結果、無冠詞を正しく選択出来なかった理由は、指示対象物が「一般的」か「個別の」かのどちらか一方になる関係（排他的関係）と仮定し、指示対象物が個別のであると考えたときには定冠詞を選択した可能性があることが判明した。また、理解をしていないのにたまたま不定冠詞を正しく選択する原因（false positives）としては、「個別の」指示対象物であれば、それが「一般的」かどうかに関わらず不定冠詞を選択するためである可能性が存在することが分かった。最後に、分析の結果、対象とした日本人学習者の場合には、全体として、指示対象物が聞き手に特定のものとして知られているか（specifically known to the hearer）かどうかで定・不定の判断をしているようだが、上級学習者の場合には、「唯一性（uniqueness）」で判断している可能性が存在することが示された。

### 発表3：「音読」から「表現活動」へ —学生の相互評価を活用して—

本研究では、初年次教育の基礎教育科目において、学生が既に馴染んでいる音読活動を取り入れつつ、学生の相互評価及び自己評価を通じて、より深い学びへ繋げていくことを目的とした一連の授業実践を述べ、今後の可能性を考察する。本学の基礎教育科目である「基礎英語?・?」（1年次必修科目・通年）において、英文の内容理解・定着を目的とした音読活動（ペアで音読、音声CDとのパラレルリーディング等）を取り入れている。昨年度の前期は、クラス全体の前で音読又は暗唱のパフォーマンステストを実施し、学生同士の相互評価及び自己評価を行った。後期は、評価ルーブリックを活用し、グループ内で評価を行うことにより、学生がお互いにフィード

バックしやすい環境作りを工夫した。学生の評価シートの自由記述欄を見ると、相互評価を通じてより客観的な自己評価に繋げていくものが散見された。活動自体は、高等学校で行われているものの「焼き直し」的な感否めないが、「単に読む」から「聞き手に伝わる読み方→発表」を意識させた活動としての一定の効果は見られたと考えられる。今年度の前期は、「音読」→「暗唱」→「暗唱＋スピーチ」と段階的に変化を加えた表現活動に切り替えていき、後期は、グループでのプレゼンテーション等へ繋げていく予定である。今後の活動内容の検証については、事後アンケート等を実施する予定である。

#### 発表4：下位レベル学生における多読のあり方に関する一考察

##### －授業内外での多読の試みから－

本発表の目的は、英語を不得意とする学生の授業内外で多読を半年間行なった結果より、特に課題に着目し、その後の多読活動のあり方について考察することである。授業実践は、2017年度前期英語リーディングの最下位クラスにおいて、多読活動を行った。参加者は学部学科の異なる6クラス、総勢155名である。授業内10分間に1冊の黙読と授業外で1週間に2・3冊を読むことを課した。その結果、半期11～13回の授業内外での読書量は、ひとり平均36冊約15,800語であった。この半期の多読活動を振り返るアンケート調査結果を情意面、メタ認知能力、および英語運用能力の観点から分析を行った結果、多読活動によって英語が好きになったり、英語を読むことに抵抗がなくなったりと情意面で多くの学生から肯定的回答が得られた。またメタ認知的能力においては、推測しながら読めるようになり読むスピードが速くなったと感じた学生が多かった。運用能力面では、語彙力が読解力と読みへの抵抗力軽減に繋がっていることが顕著に現れていた。自由記述の分析からは、「読むスピードが速くなった」や「読むのに慣れてきた」など多読の有用性に関するコメントが最も多かった反面、未知語に遭遇したときのイライラ感や内容がわからなくなるなど未知語への弊害に関するコメントも多かった。これらの結果から、今後の多読のあり方に関して考察を行う。

### 第3室

#### 発表1：小学校外国語活動と中学校英語科の円滑な接続について ー語彙に焦点を当ててー

近年の英語教育を取り巻く変革の一つである「小学校3年生からの外国語活動必修化」及び「小学校5年生からの外国語科の導入」の段階的实施を受け、小・中連携の視点での研究や調査が数多く進められてきた。そういう中で、中垣・西條・武内(2006)を含め、多くの英語教育学者らが中学校段階で学ぶべき基礎的語彙を確実に習得することの重要性を唱えていることから、小・中連携を考えていく上で語彙に焦点を置くことは重要であり、各段階における確実な語彙の定着が子どもたちの英語力の向上や苦手意識の克服につながると考えた。よって本稿では、Hi, friends! 及び中学校1年生用教科書で出現する語彙に焦点を当てて調査し、その結果を報告することとした。まず、小学校用英語学習教材や中学校・高校段階で用いられる教科書における語彙リストの作成、及びその比較・分析に関する先行研究について言及し、その調査方法や分析結果等を考察する。次いで、本稿における調査・分析方法について説明し、Hi, friends! と中学校1年生用教科書との出現語彙の連携度(Hi, friends! と6社全ての教科書に出現していれば連携度6とする)について調査する。その後、両者で扱われている語彙の特性についての分析を行う。さらに、両者に共通して出現する語彙のコロケーションの比較・考察結果も発表する。

## 発表2：意味重視のアウトプット活動が学習者の教授言語に対する好みに与える影響

本研究は以下の2つの研究上の問いに答え、学習者の教授言語に対する好みがどのようにして形成されるのかについて考察を加えることをその目標とする。

- (1) 意味重視のアウトプット活動に従事することは学習者の教授言語に対する好みにどのような影響を与えるのか。
- (2) 英語力が低い学習者は英語で教える英語の授業に対して肯定的な反応を示すようになるのか。

日本国内の大学に通う79名の学部生を調査参加者として調査を実施した。調査参加者は2013年度に高校に入学し、高校では現行学習指導要領で英語の授業を受けている。この79名の調査参加者を2つのグループに分けた。79名の内の17名は、英語での発表を主目的とした授業を受講していた。この17名を実験群（アウトプット+）とする。残りの62名を統制群（アウトプット-）とする。データ収集は教授言語に対する好みを測定するためのアンケートによって行った。また発表者が選択した2名の調査参加者に対して半構造化面接を実施した。収集したデータを分析した結果、以下の2点が明らかになった。

- (1) 意味重視のアウトプット活動に従事することによって英語で行う英語の授業に対する肯定的な態度が育まれる。
- (2) 授業内で意味のやり取りを重視した活動に従事しコミュニケーションを成功させることによって、英語力が低い学習者であっても英語で行う英語の授業に対して肯定的な反応を示すようになる。

## 発表3：大学英語教員の教育に関わる役割認識についての質的研究

言語教師認知研究は教師の信条・信念、知識、思考といった教師の内面を分析対象とする研究分野であるが、それらが授業計画・実施における意思決定に大きく関わることから、近年急速にその研究数が増えている（Borg, 2006）。国内でも中高の教員を対象に、その研究成果が積み重ねられてきたが、一方で大学英語教員の認知を探究した研究はまだ多くない。そこで、発表者は蓄積が望まれる大学英語教員の認知、特に教師の行動を左右し教師認知の中核をなすとも言える役割認識（Farrell, 2011）に着目し、その形成要因を明らかにしようとする探索的研究を進めている。本発表では、予備調査から本調査までに行った大学英語教育に携わる36人の教師（日本人教師:12人、非日本人教師:24人）との面接調査の過程とその結果の一部を報告する。同時に、面接調査に使用した材料・手順を紹介し、来場者にも調査を追体験してもらい、自身の主観的な役割認識を振り返る機会を提供したい。

## 発表4：「先生！」を英語でどういうか？－翻訳例に基づく呼称についての一考察－

異なった言語文化は異なった呼称のシステムを有しており、英語の呼称システムと日本語のそれは大きく違う。例えば、英語の授業で日本人の学生が「先生！」と呼びかけたい時、どう呼べばいいだろうか？もちろん姓に Mr.あるいは Ms.をつけるのが普通だろうが、姓を知らない場合はどう言えばいいか？また状況によっては first name を使うのも可能だろうか？従来の英語教育のパラダイムでは、「英語を学ぶのだから英語圏の文化習慣に従うべき」という考えが当然とされていたが、English as a Lingua Franca という視点からすれば、英語はアジア人同士あるいは日本人同士の間でも用いられる言語として捉えられるべきであり、そのような対人コミュニケーションにおける呼称の問題は、より複雑かつデリケートな様相を呈してくるようになると思われる。端的に言って、東アジア文化圏では年少者が年長者を first name で呼ぶのは基本的に非礼であろう。本



発表では、「先生」をはじめ「山田君」「花子さん」あるいは「お兄さん」「お姉さん」などの日本語の様々な呼称のニュアンスがが、日本文学の翻訳作品においてどのように英語で表現されているかに着目し、この問題を考えてみたい。翻訳者は時には不自然と知りつつ、何らかのやり方で話者の気持ちを伝えなければならないのであり、ここに「英語にならない日本語」をどう表すかを探る手掛かりが得られるはずである。

## 香川大学 幸町キャンパス



\* 幸町南 6 号館（法学部）は⑤です。

\* 駐車スペースが限られておりますので、車でのお越しはご遠慮下さい。

### ◎香川大学アクセス方法

- ・高松駅より徒歩 25~30 分前後
- ・高松駅より『ことでんバス（まちなかループバス）』で「香川大学法学部・経済学部」下車。徒歩 1 分。

西廻り		東廻り	
高松駅	香川大学法学部・経済学部	香川大学法学部・経済学部	高松駅
10:05	10:24	17:46	18:10
10:45	11:05	18:26	18:50
12:05	12:25		
12:45	13:05		